用水を見る其趣向甚大於歐洲未見の一大造築なり此地水と草木に乏し
貯水場の傍に小ハークあり種々の草木繁茂せり
（籠頭）此地ラクダ又は〻馬等を用ひ運送せり
土人の婚禮を見る
同廿二日　晴四字揚碇經度四十三度四十六分緯十二度四十四分行程七十
一里
セーロンへ二千六十四里暑九十三度
（籠頭）佛軍艦
同廿三日　晴經四十八度二十八分緯十二度五十二分行程二百七十二里
セーロンへ千七百九十二里
四字頃より波濤起る
同廿四日　曇〻風烈浪濤の艦を動搖する甚（以下欠）
經五十三度十一分緯十二度三十二分三十分行程二百七十二里

セーロンへ千五百二十里暑八十六度
同廿五日　曇風浪如昨日經五十八度三十三分緯十一度三十六分十五ァ行
程三百十八里
セーロンへ千二百二里暑如昨日
同廿六日　曇風浪尙如昨日經六十三度三十一分緯十度八分十五ァ行程三
百六里
セーロンへ八百九十六里暑凡如前
同廿七日　曇風浪纔に靜なるを覺經六十八度三十三分緯八度九分三十ァ
行程三百二十六里
セーロンへ五百七十里暑八十五度
同廿八日　曇風浪如昨日經七十三度十六分緯六度四十四分三十ァ行程二
百九十里
セーロンへ二百八十里暑八十四度二字後數雨冷如秋

終日不快無食味

同廿九日　曇一字にセーロンのゴール港に着す三字上陸ホリヤンタルホテルに至る近傍へ車行し土人商業の形情等を一見す此地滿山滿野皆椰子樹土人中已下の皆專ら此實を常食となせりと云（此實中よりミルク盾のもの出る）其他種々の菓物不少椰子につぎては芭蕉の實多し土人鼈甲細工象爪細工なとをひさぐもの多し余等數種をもとむ夜散歩し歐人の家と見へ蒼々たる樹林の中にひはなの音あるを聞幽趣の情を起せり

夜雨

同三十日　晴市街を散歩し其より毛利公園人なとゝパークに至る（此間凡四里）途中にバラモンの舊跡などあり青稻の穗を出せしなどを見る此パークは只自然の形容にて池水なとあり此近傍皆土人而已住せり二字過歸寓

此處は元蘭の屬地にて（以下十行欠）

七月朔日　七字船へ歸れり十字揚碇經度七十八度十二分緯度五度五十四分行程二十里

シンカホールへ千四百八十里

此日雨あり海上靜なり

寒暖計七十六度

同二日　海上無波經八十三度十五度四十五ア緯五度四十六分行程三百里

シンカホールへ千二百八十里寒暖計如前日此日雨あり

同三日　晴海上甚靜經八十八度廿四分三十ア緯五度四十二分三十ア行程三百里

シンカホールへ八百八十里寒暖計八十七度

同四日　晴經度九十三度十九分緯度四度五十三分行程三百里シンカホールへ五百八十里寒暖計如前日

同五日　晴風波甚穩經九十七度十二分緯四度二十四分行程二百四十八里
シンカポールへ三百三十二里寒暖計九十二度
同六日　晴海上如前日經百度二十四分緯一度四十八分行程二百四十九里
シンガポール　八十三里
夜八字シンガポール港口に至り碇泊す
日已來時々左右嶋嶼を見或はマレー或は　の陸地を達す
同七日　曇此日白雨屢來る六字港内に入る兩崕の青山又一種の風光獨怪
青樹の潮水中より繁茂するを十字半上陸ホテルドヨーロッパに至る凡
三里途中土人或は支那人の家なとを見る市街を散歩せり土人の家店尤
不潔なり支那人も似土人もの不少尤間々有大家支那物を專らひさけり
他は多く西洋店なり支那人羅氏の店に至る暫筆談せり（以下七行欠）
同八日　晴六字揚碇經度百二度十二分緯度一度三十四分行程五十一里
サイコン迄五百八十六里

夜暴雨俄來激波入窓
同九日　朝雨あり經百三度四十三分緯六度十七分三十分行程二百九十七
里
サイゴンへ二百八十九里
昨夜來感時氣々色甚惡
同十日　晴午後三字サイコン府へ達す所謂西藏より流出する　河
なり河口より府に至る凡三十　里河の方兩傍平地にし多く米禾を耕せ
り本邦へ輸入するもの多く此地の產なり此地は安南に　年より
佛の管轄に屬す亞細亞地方多此類不得不寒心外國の大船碇泊するもの
不少岸へ橋し上陸するものあり其深可知此地へ揚陸する客亦不少六時
頃より揚陸して市街を散歩市街西洋市街に類して佛の管轄已來着手せ
しものと見へたり未西洋風の家屋は僅々支那人支店尤多し印度邊の人
種もまた雜居す象爪細工數種を買ふ九字歸船

同十一日　晴六時前より揚陸馬車にて松林府に至る行程凡四里府無可見物只兩三の寺堂あり關羽を祭る（別に舟神あり）其建築尤結構雖然掃懶惰にして甚不潔なり練瓦石或は石等を用ひまた彫刻等微密を盡せり西洋の如く高大ならず歸途佛の鎮臺府を一見しまた禽獸園に至る十字前歸船一字揚碇河口の海水泥色なり

土人の風俗また一種にして男女の看別甚難し皆常にビンロージを食し唇齒總帶紫黑色馬車セイロン、シンガホール等と其形皆同一揚陸するときは御者群集客をして車をすゝむる切なり（御者皆土人）

屬地のホリス等は其土人を雜用す

同十二日　晴經度百七度十六分緯度十二度十九分行程二百五十五里

香港まで六百六十里寒暖計九十度此日は安南地方に傍ふて航海す時々陸地を見る

同十三日　晴經度百八度三十七分三十ア緯度十六度三十五分四十五ア行程二百七十里

香港まで三百九十里寒暖計九十二度

同十四日　晴經度百十度三十四分十五ア緯度二十度三十九分行程二百七十里

香港まで百二十里

夜十字香港に入る于時天色清朗明月上山海先如寫凉風吹衣實に覺快

何横山揚陸

西貢より香港まで海上甚穩

夕六時（鼇頭）雨大陽直下を南より北へ通過せり

同十五日　晴六字船を海岸密着せり領事林道三郎來訪食後與彼揚陸乘椅（チヤ）子領事官に至る山上にて景色望海與山官亦清淨なり認晩食其より市中を散歩す于時雷雨暴來

六字前歸船再揚陸香港ホテルに至り泊す

支那人の店肆も英の管轄にて市街等歐洲に似たり亞細亞地方にて未見如此清潔市街尤支那人の屋宅は全異與歐洲纔に買土物日本の一店あり皆漆器なり

雷雨屢來

十六日　曇雷雨屢來

毛利（縫頭）世子森何横山藤原なり

十字歸船十二字揚碇

昨日來本邦に至るもの擧て人與荷移船其混雜尤甚船名メンザレー室は十七十八番なり本船は直に上海に至る餘は皆枝船なり

林舍弟甚八郎金田某と從是同船せり

同十七日　曇又雨比本船すれは總て數等を讓る且風波亦不便動搖殆如支度海甚困却するもの不少

經度百十五度四十二分緯度二十三度四十五分行程二百四十里

横濱へ千三百九十里

同十八日　晴海上前日より穩なり經度百十九度〇六ァ緯度二十五度四十九分行程二百三十五里

横濱まで千百五十五里

同十九日　晴風波共穩經度百二十二度四十分緯度二十八度〇三ァ行程二百三十四里

横濱へ九百二十一里

至夜涼氣侵膚

同廿日　晴經度百二十六度〇四分緯度三十七度十七分行程二百四十里

横濱まで六百四十一里

六字頃薩州草かき嶋左方へ見て過けり繼てまた黑島を同方へ見て過く

一字頃さだの岬に傍ふて通過す燈明臺あり

同廿一日　晴經度百三十二度四十四分緯度三十一度三十八分（今日より英法を用へり）

行程二百四十五度

横濱へ四百三十六里

海上尤穩潮水如油

早天遙に土州地方へ見其他終日不見山

同廿二日　晴床上より紀州大島の山色見入圓窓起て眺望すれは山色青々如逢舊知

經度百三十六度四十八分緯度三十三度四十八分行程二百五十里

横濱まで百八十六里十一字色崎三ヶ本の燈明臺を見る

同廿三日　晴六字過城ヵ島沖より灣に入る八字前碇泊于横濱沖藤井八十衛大黒屋貞二郎來る又山尾工部大輔佐藤燈臺頭英人ブラントン來る共に上陸してブラントンの宅に至り食事を認む其より鈴村の家に至る陸奥陽之助中島作太郎土井縣令山東一郎尋來る二字より汽車にて新橋ステーションに至り馬車にて歸家客來滿席

同廿四日　晴終日家居來客不絶

舊知事公御出

同廿五日　晴終日家居來客不絶應接甚困

夜雨

同廿六日　晴十字より森有禮を訪ひ直に高輪御屋敷に至り舊知事公御夫婦御母堂公に謁す談話數字其より山尾伊藤井上柏村等へ至り十字歸家

同廿七日　晴十字四ッ谷

皇居におゐて拜

天顔云々御尋あり賜酒餐其より正院に至り大臣公參議及諸官に會す退出かけ大久保を訪ふ不在黒田來訪云々賴談あり

同廿八日　晴十字過より河瀨を訪ひ大隈を訪ふ皆不在井上に至る一昨年來の事情を聞得す澁澤榮來會三字頃より隅田川へ舟行す吉川マ、亦來會十字過井上に歸り一泊せり

留守中の形情紛紜細縷不能盡筆頭爲天下後世只不堪長歎

同廿九日　晴十一字辭去歸途山口岩倉田中の留守を訪ふ昨日條公より書翰あり依て伺候せり于時御不快のよしに付來る三十一日を約して歸る

五字後後藤象二郎吉川殿山田少將宍戸敎部大輔野村文部大丞を訪ふ後藤而已在宅

十字歸宿

同三十日　晴何禮之より書狀到來○ハーソン歸米云々の事申越せり依て野村に至り○ハーソン御雇等の事を承知し明日池田を横濱へ進すに決せり

夜河瀨に至る谷梅之進歸國に付宅へ連れ歸れり

鳥尾來訪

同三十一日　晴淺草に至り山縣篤藏を訪ふ不在東本願寺に至る默雷〻〻等も亦來る其より大隈を訪ふ四字歸宅夜三浦梧樓を尋ぬ今朝森寺來訪

今日三條公へ約あり御病氣に付御斷なり

八月一日　朝井上世外を訪ふ一昨日同氏へ一書を送れり其主意は使節も不日歸　朝に付暫時奥州行を見合せ在留をすゝめり付ては余亦先年來不如意の事件擧て不可數數々至于今日其元由を吐露す于時山縣烏尾亦來る一字辭去途中に山田を訪ひ染井別莊に至る過日來來客不續甚困却せり

今日平岡通禧桂太郎の弟〻を養子となせり余も亦其招に預れり

同二日　晴近邊の植木屋巢鳩長太郎の處に至る平岡安〻内なり松井上の妻と來る

終日餘暇に讀書せり夜訪平岡

同三日　晴到于平岡開拓之地面を一見す宍戸柏村來會又余の莊に至る夜與平岡訪中嶋四郎

山田來話

琉球人（離頭）在留浦添親方與那糸親方大宜見親雲上

同四日　晴岡義來訪五字去て上野松源亭に至り山田顯晴湖等に會す十字過歸宅

同五日　晴野村を訪ふ不在ベルリンにて青木品川の言あり依て野村所藏の那翁小像を取歸れり宍戸に至る談話數刻野村も亦來會十二字過歸宅陸奥租稅頭來話大藏省の混雜せし元因且入稅の概算等逐一了承爲前途懸念するもの不少五字より有約三條公に至る談話數時九字歸宅

同六日　晴十字頃より井上來話余井上の羽州行をとゞむ彼今日他へ關係するもの尤多く則今直に此行をとゞむるときは他人へ損失を及すものもまた不小依て一度羽州に至り余の得報知ときは速に歸京せんことを約せり鳥尾山縣西郷眞悟等來話四字頃より兩國增田屋へ會す井上陸奥澁澤等も亦來會九字皆去途中白雨に逢ふ

同七日　晴上野外務少輔を訪ひ外務之情況を了得せり其板垣參議を訪ふ不在大久保に至り暫時相話す大木江藤を訪ふ皆不在十二字過歸宅四字より長府毛利殿に至りまた德山毛利殿に至る平六公不在老公へ謁す大野亦不在なり歸途森寺國を訪ふ八字過歸宅河瀨殿衞澤田等來話

井上（離頭）彌吉來話

同八日　晴井上に至る暫時相語る森清藏を訪ふ不在十一字歸宅二字より山縣狂介と約あり彼の宅に至り談時事語往時至六字其より孛公使を訪ふ須臾相語る八字歸宅山田顯來話福井順道今日歸　朝直に來訪せり

同九日　晴山縣狂介來訪昨夜井上より余に書狀を投し山縣の發途をとゞめり其云々なり九字出家至横濱宿鈴村佛蘭英米魯の諸公使を訪ふ英佛而已在宅面會せり米と魯は其妻面會す昨日河北義吉田大藏少輔等と歸朝河北直に來訪今夕より出京余の宅に至れり

中島作來訪彼今日より長崎に至れり

夜パーソンを訪ふ不在

（籠頭）當縣典事蘆高郎爲余通辯せり

同十日　晴パーソンを訪ふダイモントに面會す不圖モリーにも出會せり

ダイモントの情實實に云々甚不堪ものあり

十二字歸宿山尾一家妹も亦來港六字より皆歸京

夜居留地を散歩す

同十一日　齒醫エリオトの處に至り其より英店五十九番に至り又パーソンを尋ね十二字過歸宿

三字頃纔に白雨來る終日南風尤烈

四字出車品川より車を下り井上老人を訪ひ又齋次を訪ふ不在伊藤の留守に至り家内と相話し少女などを見其より山尾に至りまた高輪の御館に至り　御夫婦樣へ謁し食事等認七字過辭去齋次柏村まで來り余の歸途を待てり依て相共に又山尾に至り一泊す

同十二日　晴早朝鮫洲に至り山内容堂公の墓へ參詣す舊時を追想し不覺慘然たり墓もりの　　と暫談話して去また山尾へ歸り食事を認め十字高輪より車へ上り新橋より工部省の馬車にて歸れり

二字後宍戸三郎を訪ひまた鳥尾小彌太を訪ふ　　等圍碁

（籠頭）今朝齋次來訪

同十三日　晴華族伊達春山を訪ひまた長與專齋を訪ふまた琉球藩邸に至り　　面會し其より宍戸三郎の處に至り二字歸寓

孛青木周藏佛入江文郎書狀を落手す

何禮之來話野村素介鳥尾小彌山縣狂介來話杉山耕亦來話す

（籠頭）途中にて田中文部に面會す

同十四日　晴南風甚烈如十一日砂塵如烟

琉球浦添親方魯公使等來訪外務三等書記志賀親朋魯公使同行せり藤井勉藏平岡兵部井上齋次赤川雄藏妻來る

今日御用召あり依病辭せり

夜河瀨殿衞を訪ふ

同十五日　晴副島外務卿上野外務少輔來話

木梨信岡義鳥尾小來話

青木へ書狀を送る

同十六日　晴三浦梧樓福原内來話九字外出至于染井訪平岡十二字前至別業來原妹山尾夫妻及小兒井上齋次父子已に來て在莊中且臥且起閑話及晩六字前より植木屋をめぐりまた平岡に至る七字前歸莊

今夕白雨纔來る夜また來

同十七日　晴十字過より與山尾井上訪中島不圖逢高橋熊太郎其より柳澤の舊邸跡に至り庭中の形樣を一見す風色甚佳また植木屋に至り或る織物場に至り十二字過平岡に至る擧家皆平岡の饗に預れり歸途田畑の梅林に至る五字歸莊山尾井上も亦歸家平岡話して至十二字

木梨陸奥等の書狀到來

二字夕雨六字八字兩度又來

同十八日　晴三條公より書狀到來今日パーソンタイモント等を招きし約あるによりて斷りに及へり三字過よりパーソン、タイモント森有禮何禮之來訪閑話談數字認食七字頃歸去平岡中島來話

長太郎（籠頭）より花を贈れり

同十九日　晴蘭竹二体を買得せり十二字前より染井を去り杉山耕を尋ぬ不在其より岡竹城を訪ふ又藤井勉を上野圓珠院に訪ふ不在歸途山縣に至るまた不在二字歸宅其より宍戸河瀨に至る宍戸に余の陳述書の草稿を示し河瀨に租稅新令の余所以不安を論す六字過歸宅

京都府權典事木村源藏來話京府と京都裁判所との訴訟云々にて裁判所々置不都合にして政府の主意も亦人民を保護せさるに似たり

同廿日　晴何禮之を訪ふ岩倉に至り大隈に至る不在上野に至る不在森寺

に至る大臣公の傳言あり外務省に至り上野少輔に面會し談話數刻二字歸宅四字
より宍戸に至る于時平岡亦來話其より野村を訪ふ不在七字歸宅
夜槇村京都府參事來話河瀨權令も亦來話
大隈（離頭）へ一書を送れり

同廿一日　曇兵庫長門屋來る十一字訪西郷老人談話數字其より駒場に至
り別邸地を巡視し歸途黑田開拓長官に逢同氏の誘引にて開拓地所の草
木及牛を一見す大南瓜量十三モロコシ三種持歸れり黑田の周旋なり皆
珍品にして於東京其他未見ものなり六字過歸宅宍戸來訪九字飯田町邊
を散歩し浮田を訪ふ

同廿二日　曇河北義兒玉マヽ野村素來訪四字外出森有禮を訪ふ不在中井弘
の留守に至り母妻及小供に面會し其より田中不二麿を訪ひ談論數字七
字歸宅
高輪從三位公吉田大藏少輔より昨日書狀到來依て及返答

（離頭）パーソンの書狀を落手せり

同廿三日　晴森有禮ダイモントと來訪中野山口權令木梨信來話一昨年來
山口縣内の事情を巨細に了承し大に安堵せり山口縣の令實に不謂得其
人
五字過より吉田大藏少輔の預招彼の宅に至れり坐客充滿

同廿四日　晴福原恭及兵庫長門屋來話横山孫一郎糸價下落云々に付龍動
の年々標持參彼の考案を語れり依彼賴三ノ村利右衞門へ添書せり
二字陸奥陽之助と有約至于彼宅春來の變遷せし元因を開當日の光景を
論しまた租税の一條等を論す然して父自得翁に面會し前島驛遞頭亦來
會談論小酌或は揮書畫辭去するとき已に一字由良守應と連車歸家

同廿五日　晴宍戸杉を訪ふ不在長南梁を訪ふ河瀨の宅に至り書狀を認

同廿六日　晴佐畑健助の宅に至りまた大田左門を訪ひ其より鳥尾に至る
不在不圖萩吉廣マヽの面會萩城の近情を聞得す四字宍戸に至りまた杉孫の

宅に至る談話數字また宮内中の情實等承聞せり

米公使グラントン書記官ライス來話

同廿七日　晴河瀨に至り大隈に至る不在なり山尾に至るまた不在二字高輪御邸に至る華族九條伊達備前池田父子因州池田淺野越前松平龜井等集會なり依て歐米の形情元來華族たるものゝ責等巨細に論談し將來の目的等陳論す然る後山尾亦來て鐵道等の事を語る九字歸家

飯田（籠頭）吉二郎蘭より書狀を送れり彼病氣云々依て宍戸より野村素介へ通し文部より呼返の都合になせり

同廿八日　雨宍戸三藤井勉河北芳由良守等來話

井上世外へ書狀を出せり

池田寛治山田顯義を訪ひ其より杉山耕太郎宅に至る晴湖竹城も在席小酌談話九字より染井に至る于時大雨

同廿九日　曇又雨菱田文藏鴻雪爪岡竹城來訪槇村半兒玉淳

來訪京都府と京都裁判所と云々なり

雪爪竹城一泊せり

同三十日　晴又雨歸途宍戸に至り四字過歸家福原狂介松岡勇記來話池田豐德より杉折を贈れり

同三十一日　晴朝横山孫一郎大倉屋商法の規則方法更に不相立當時專ら豪商と唱ふるものも多く官員に媚び各一時の僥倖爭ひ或は謫詐專らとし眞の商法の規則法方の不相立を歎し來て前途の主意談話し云々を余に依賴せり何禮之もハーソンの事に來話

九字頃より澁澤榮二を訪ひ談論數字一字歸家京都府山本格馬來話數字當世の形情を談論し彼亦與余同歎するもの多し

明日高輪邸より御三方染井別莊に御出あり依て今晩より至り泊せんと欲し九段坂にて馬驚き馬車より落肩と頭を痛き不得止歸臥

山尾（籠頭）鳥尾宍戸等來話

九月朔日　雨又晴岡義長松來話九字至染井別莊十二字
御母堂樣御夫婦樣御出なり柏村檜崎陪從女中三人廣澤娘皆御供なり杉
野村平岡陪席清元延壽太夫及其外三名（内二人三味線）清元六段を語る
八字頃御歸館杉一泊せり
同二日　晴又雨十一字出別莊訪中島四郎之病一字歸家杉山耕野村素來話
妹來泊
九月三日　雨又晴河〻白根山尾杉竹田平岡來話鳥尾野村宮口來話四字三
條公に至る談論中西鄕參議より臺灣出張朝鮮討伐建言云々あり且
朝廷上にも已に欲決議依て不堪深憂今萬民困苦新令屢傳て民益迷去年
來蜂起する數次政府以て爲常當時語方略は無急於治内政云義務無先於
保護唐太人民而雷同于世論益困人民彌損國力決て余の所不服也制有罪
何必論時遲速然則當時の以治内政第一着とす

（籠頭）内政未整
同四日　南部〻來話青木家始抹云々なり横山孫一郎來話九字より長與專
齋を訪ひ其より後藤象の宅に至る十二字過歸家山本格馬來話福澤諭吉
兒玉淳一郎長與專齋なと來話共に時勢を慨歎せり杉山耕作間正來話福
井順道上國より歸れり
冨士見丁のもの〻十人餘移住の事に付歎願書持參せり
同五日　晴鳥尾來訪八字過出門九字新橋ステーションに至る不圖パーソ
ンに面會す十字至于横濱横山大倉同行なり横山とエリヲトの處に至り
また五十九番に至り大倉屋にて食事を認め三字パーソンを訪ふ已に歸
て在于ホテル彼の心事を聞得し遺憾不少彼明日乘艦明後朝出帆の積り
なり六字横濱に出七字前品川に着山尾に至る柏村竹田財滿井上等と同
食す余は終に一泊せり
同六日　晴高輪邸に至り從三位公御夫婦に謁し華族御集會に付愚考を陳

述せり

其主意は當時の華族自己の責を不思無益の交際に時日を消せり依て各互に其責を論窮し國家の爲に盡力するの志を起さんことを欲す故に華族の集會へ議長を定めんとす

小幡（籠頭）鮮山

同七日　晴岡義岡竹城山本清福澤諭來話また野素藤井勉森清山市來話夜宍戸に至る

同八日　曇又晴十字過染井別莊に至る山本清兒玉少藤井勉島地默山中靜來話兒玉藤井島地一泊せり

同九日　曇又晴染井の歸途、を傳通院内の所靜院に訪ふ不在二十年前の知人なり勝間田百助明日より山口縣へ歸縣せしよしにて來話せり

米人ライス兄弟來訪

何禮之來訪

夜杉山耕太郎の處に至る岡竹城も來話せり

同十日　雨西村林と有約爲病斷れり十字頃高輪舊知事公御出あり山口縣々令中野亦今日より歸縣せしよしにて來話せり二字より五字頃まて、來話吉田松陰師の曾て余に與へし書翰を持參せり語二十年前之事不覺生感由良横山來話夜訪杉猿村

同十一日　雨三浦五郎古藤次郎助杉孫七郎鳥尾小彌太等來訪西岡中議官過日西洋より歸り今日來話せり十二字より高輪御邸に至るの途中逢山尾同車して竹田庸を訪ふ不在山尾よりまた伊藤に至り其より御邸に出河瀨安四郎宍戸三郎野村素介山田市之允杉孫七郎等曾て政府或は近昵を勤めしものを公事間に召され世上の談を一月に一度聞せられたしとの事にて已に今日は其初會なり六字認食七八字の間皆辭去

陸奥（籠頭）宗光書狀到來

同十二日　雨（以下欠）

高杉谷梅之進（籠頭）寺内〻〻書狀到來

同十三日　晴條公に至る御不在なり于途逢江藤參議十一字森有禮を訪ふ不在暫ダイモントと話す其より由利〻〻を訪ひ長與專士方久佐々木高を訪ひ一字歸家江藤參議來話四字後宍戸に至り食後共にまた杉猿村を訪今朝九字大使副使伊藤山口其外着港二字歸京岡竹城昨夜來留泊余の草稿を寫せり杉山福井來訪

山本清十郎（籠頭）來話

同十四日　雨作間一介來話正院用度課へ八月分月給の内二百五十圓返納せり○伊藤春畝來訪歐洲一別已來の事情を承了しまた本邦の近情を話す澁澤榮一來話杉山耕岡竹城來話

同十五日　雨又晴杉孫七郎來話田中健助杉浦弘藏來訪池田寛治來話過日持參せし譯書の内一冊を返與す山尾庸木村源來話

三條公へ愚案を陳述せし一冊を出し呈一書然る後三條公より答書來る伊藤へ一書を送るまた答書來る大隈へ一書を送り上野へ愚按草稿一冊任彼望一見せしむ○山縣甲之進奥平二水の書狀持參森清藏留守へ來訪明日より浪華へ至ると云

江藤新西岡逾を訪ふ不在野村素を訪ふ夜木梨信福井順來話

同十六日　晴七字出家福澤諭吉を訪ひ談話至于二字認食其より訪伊藤春畝不在暫時山尾と相話し歸途森有禮を尋談話數刻今朝森亦訪余佛人の日本の風俗等を著述せし二大冊を持參して余に贈れりまた岩倉を訪ひ面會す歸途訪宍戸暫時立談夜山本覺を訪ひ十二字歸家

條公（籠頭）より來書

今夕より腦中不平生頭痛甚烈至于山本途中人力車觸石覺響腦中

三日前より俄に不能安眠

同十七日　曇又雨又晴八字出家山口尙芳を訪ひ其より藤井勉三を訪ふ勉

三明日より歸縣なり十二字染井別業に至る馬車を下る時左足の不自由なるを覺ふ安臥養精神三字頃宍戸來訪共に平岡に至る（祭事の案内なり）六字歸莊宍戸平岡井上齋有地ヽ來話有地一泊せり

同十八日　雨二字過歸家長與專齋來診宍戸平岡河瀨杉山本村源藤井八十衞來話平岡一泊せり森有禮來話數字夜三字頃より頭痛發動睡眠纔三字

同十九日　雨藤井八十衞秋良貞溫黑田良介肥田濱五郎野村素介來話長與專齋來診三字過英公使パークス同書記サトー來話五字ホフマン來診通辯は柴良ヽなり長與亦來訪作間一介佐畑鳥尾中島河北寬堂來話夜三字頃より頭痛發し睡眠纔三字

同廿日　晴又雨頭痛未治柏木忠俊來話（足柄縣令）長與專齋來診山田少將より來書過日貸與せし金を返却せり木村杉山山本岡竹城作間來話山田少將來訪杉山も亦重て來訪小河一敏來話夜江藤參議來話（籠頭）三字過纔起頭痛睡眠亦不過四字間

同廿一日　雨

鳥尾小彌木村源藏山本覺馬中嶋作太郎來話長與專齋來診井上齋治ヽ來訪夜森寺谷口起尙來話（籠頭）福井今夕より來泊

同廿二日　雨那珂木村宍戸璣河瀨安久米邦武伊藤春畝三條河北義二郎來話井上齋治ヽ來泊出石直二郎來る（籠頭）三條公陸奥より書狀到來

同廿三日　大風雨山尾木村來訪藤井八十衞來る

同廿四日　晴兒玉淳一郎河瀨安四郎大久保利通西岡逾明鳥尾小彌太陸奥陽之助河北義二郎伊藤博文木梨信一柏村數馬笠原圓藏福原狂介長與專齋ホフマン柴良海橋市木村源藏杉山耕太郎谷口起尙來訪

孛國青木より書狀到來

（籠頭）博文より近況を巨細了承せり岩倉も亦屢博文を訪ひしと云

同廿五日　曇安市太郎來訪明日より萩へ歸れり依て奥平二水へ一書を託す宍戸璣杉孫七郎島地默雷來訪久保斷三より書狀到來
米人モリー杉浦弘藏と來訪野村靖之助杉山耕太郎來話
鴻雪爪來泊
伊藤（鼇頭）博文より書狀到來依答復して余の心事を縷述せり
同廿六日　雨大田左門長與專齋鳥尾小彌太伊藤博文山尾庸杉山耕太郎木村源藏谷口起尙來話博文より其後の時情を巨細に了承せり
後藤參議より書狀及菓子を贈れり
同廿七日　雨天野正世兒玉淳一來訪井上世外昨夜奥羽より歸京今朝來話
杉浦弘藏杉山耕太郎來話ホフマン柴良海長與專齋來診
英息正二郎平原太作より七月廿九日の書狀到來桂（李）太郎より七月廿六日の書狀到來
同廿八日　曇那珂通高福田伊八來話檜了助中島權的中島四郎來話南貞助
井上新一河瀨安四郎鳥尾小彌太野村靖之助來話竹田春風來訪鐵道開き實況の寫眞數葉を持參せり
同廿九日　雨學僻來話河瀨外衞山本清十郎赤川雄三來話長與專齋來泊昨夜已來頭痛發起氣分閉塞
同三十日　曇又雨木村源藏河瀨殿衞野村素介來話岡義右衞門三浦梧樓岡竹城河瀨安四郎伊藤山尾來話伊藤より近況を了承せり長與專齋青木群平井上因石橋市宍戸璣來話ホフマン司馬良海來診
十月朔日　雨長與專齋來話昨日伊藤の談話のつゞきを以三條岩倉二大臣來話數字胸中の議論を吐露す其徹と不徹と不能察如何勉病苦故覺其勞
山田市之允杉山耕太郎木村源三來話（マヽ）磯右衞門來泊
杉大丞（鼇頭）より文棚具を貸與せり
同二日　曇又雨

勅使片岡侍從來て訪病交肴一臺を拜戴す兒玉愛之助香川敬藏同道大侍醫岩佐純ホフマンの二醫を病御尋問として被遣司馬同伴なり伊達自得三浦梧樓來話清水屋銅玉等の數餅を持參せり

同三日　雨赤川雄三井上因石兒玉淳一郎槇村半九郎木村源三來話

同四日　晴兒玉少輔野村素介由良源太郎何禮之木村源三田中不二麿井上世外岡竹城山本清十郎宍戸璣山尾庸三鴻雪爪伊藤春畝丸山太郎來訪英國芳山五郎介正木泰藏平原太作息正二郎への書狀贈物等シャンドへ托す平原太作への四百五十兩の送金も同人へ托す河瀨安四郎長與專齋杉山耕太郎井上因石横山孫一郎來訪

從三位公御出あり

同六日　晴長與專齋島地默雷晴湖井上齋治夫妻來訪ホフマン司馬來診

今夕梅園に至る

同七日　晴竹城學憐素中三浦梧樓杉猿村木梨信一木村源三杉浦弘三有地品之允河北義二郎佐畑健介來訪長與專齋來診伊藤妻子來訪夕梅園に至る

同八日　晴由良源太郎鳥尾小彌太山田市之允福原判野村靖之助來訪ホフマン司馬來診

同九日　晴山尾庸藏兒玉愛二郎大田左門木村源藏伊藤春畝杉猿村山縣篤藏來話

同十日　晴又雨吉本新九郎岡竹城青木群平兒玉淳一郎大久保大藏卿槇村半九郎長與專齋來訪ホフマン司馬來診杉浦弘藏秋月從四位伊達從二位來訪昨日資生堂上留水とアルコールと調合を誤り腦痛を起し爲其甚困

同十一日　雨宍戸璣森寺邦之助何禮之新庄半之允平川魁助肥田濱五郎福原恭助來訪ホフマン長與專齋司馬來診

同十二日　雨山本清十郎井上世外岡竹城山尾庸三杉浦弘藏長與專齋來訪名東縣久保斷三より來翰

笠原昌吉木村源三來話

同十三日　雨河瀨安四郎岡竹城伊藤盛貞來訪平岡兵吉伊藤春畝野村靖之助檜了介來訪ホフマン司馬來診

同十四日　晴木村源三何禮之杉猿村遠藤金助來訪淺間鐵之助從孛歸朝來訪

小林來て織物の事を語る桂太郎靜間謙介亦從孛歸朝來訪桂は直に宿泊せり杉山耕太郎平岡直武來訪島田助七上國より歸り來訪木村源三那珂通高來話

同十五日　晴木村源三西岡逾明來訪井上彌吉來訪原田音三從孛歸り來話長與專齋來診山田市之允來訪〃

同十六日　晴靜間謙助山口範藏野村素介佐藤寛作岡儀右衞門三浦梧樓大岡大眉由良源太郎島田助七伊藤春畝河瀨安四郎木村源三河北義二郎來訪

三條公來談

ホフマン司馬來診

同十七日　晴作間一介來話同人へ托し辭表を出せり木村源三來訪槇村正直を臨時裁判所へ拘留せしよし依て參坐土方と參議江藤へ一書を投す司法の所致法外の事不少實に可歎

小幡餅山出京せしよしにて玄關まで來訪山尾庸藏光田〃井上新一來話

同十八日　雨作間一介來話戸田三郎從英昨夜歸朝來訪依て三條公の昨夜來不快のよしを傳承せり三條公は篤行至誠十一年前より爲國家に艱難をなめ大政一新後は　朝廷の重きを任し倦色なく喜怒不見色而して近來臺灣朝鮮征伐等無謀の暴論起于　朝廷內內閣の參議も逃已讓雉の徒不少困憂終にこゝに至れる歎と想像し實に不堪悲歎なり伊藤春畝來て朝廷上紛紜の事を告ぐ不堪慨歎一書を大久保に投ず今朝作間に託し三條公へ出せし書狀岩倉へ出す土方より今朝昨夜の返書を落手せり兒玉

淳一兒玉少輔谷口尚、孝横井忠直來話

同十九日　晴河瀨安四郎島田助七靜間謙助平岡二郎井上世外平岡兵吉杉孫七郎中島信行小幡彦七杉山耕太郎横井忠直長與專齋兒玉淳一郎宍戸璣來話條公内高橋久道來て條公昨日來の條公御病氣の容體を告けり

（籠頭）世外來る廿一日の飛脚船にて山口に至れり

同二十日　曇横山忠、直兒玉淳一三浦梧樓伊藤博文永安和惣岡竹城來話ホフマン司馬來診谷口起孝來訪槇村參事拘留一條に付今日上書一冊を出し諸參議へ副啓を投す今日伊藤來て頃日内閣紛紜の情實を具に了聞また岩大久等の決意を聞漸心思を慰するものあり

今夕岩倉へ一書を寄せ大久保と懇談熟話今日の危急を維持あらんことを請ひ且予如此際におゐて死力の限り盡して以て報萬一と欲す平生の素志にして然して此病にかゝり起臥獨り自由ならず實に殘慨なり依て伊藤博文を薦めて參議となさんと欲す岩倉承諾の答書あり

時事と裁判所一條に付大隈へまた一書を寄す

山田市之允山本清十來話

同廿一日　曇戸田三郎山田市之允來訪

伊藤博文來話過日來の朝議紛紜の末副島參議西郷後藤板垣江藤諸參議の同論にて此度の議論を改て起さんことを岩倉大臣に請ひ大臣これを許せしと依て又再議論の艱難に趣かんことを憂ひ爲天下不堪悲慨博文亦號泣數刻

今夜憂鬱痛按不能眠橋市來泊

（籠頭）又生腦痛

同廿二日　晴林半七來話同氏五月筑前頑民蜂起の爲に九州に至り此頃歸京せり

朝廷上の事不堪煩念一書を伊藤博文に送り今一層盡力あらんことを求む

木村源三來訪一書を添へ西岡議官へ上書と副啓をおくり槇村拘留等の事を論す西岡は參坐の一人なり

終日鬱々甚不樂杉猿村來話

同廿三日　西岡來て參坐の近況を語れり横山孫一郎來話土方久元來話伊藤博文兩度來訪天哉昨日西郷板垣後藤江藤副島五參議岩倉大臣へ迫り朝鮮一條を欲決然るに其前副島の改て再論する云々他の參議皆不知依て副島と板垣と却て議論を生す板垣等は朝鮮論已に決只其方略を論する而已と云と云然して別に江藤又大臣へ迫り大臣異見同意すべからざるを答へ且かゝる重大事件不歴奏問元より不能答と依て西郷參議事の察不成起ゐ去直に辭表を出すと云餘の參議は今日副島へ會し各以病辭表を出すに決せりと

小幡餅山宍戸來話

同廿四日　晴三浦梧樓來話過日來三浦と山田とに兵事に付窃に注意の件を談せり

森寺常德を招き去十七日夕條公の顚末を御自筆にて岩卿へ御投しあらんことを談せり是は爲後日と離間を防ぐの爲なり

西郷今日參議を免せられし諸參議今日辭表を出せしよし岩倉大臣過日來　朝議云々の次第を昨日及奏問今日　勅答あり其顚末を土方内史大臣公の命を來り告けり

ホフマン來診司馬同行

澁澤喜作陸奥陽之助平岡兵吉遠藤謹助鴻雪爪宍戸璣鳥尾小彌太來話平岡鴻一泊せり

同廿五日　晴田中健介河瀨安四郎山尾庸藏島地默雷福地源一郎兒玉順一長與專齋中島信行來話

横山孫一西村茂樹を同伴せり元老院を起し維持の一具となさんと欲し曾て高輪邸に至り從三位公へ建言せり然るに西村亦此志ありと聞依て

相談論せり

果して如按三條岩倉の間を離間の說あり森寺を招き其事を告く森寺亦大に驚く

今日岩倉へ時事に付數度應復伊藤へも亦同し三四日の間不分晝夜應復頻々病中實に不堪煩吉冨の書狀渡邊洪基の書狀を得る

同廿六日　雨又晴靜間謙介平岡二郎福田〻來訪鳥尾小彌太長與專齋來話長與へ青木より申越せし敎師云々を相談せり

伊藤春畝來て昨日來の情勢を告けり

吉川健吉谷口起孝來訪

杉猿村小幡餅山佐藤寛作來話

新參議昨日皆奉命

同廿七日　晴寺嶋宗則來話兒玉淳一郎柏村數馬島田助七笹尾卓馬長門屋來訪

奥平二水從萩今晩來着山口縣の近況を聞得す

同廿八日　晴天野正世杉猿村來話三刀屋七郎次河內宗一佛國より頃日歸來々話

伊藤博文來話此度の一條にて西郷俄に歸國薩の兵隊士官其始より朝鮮論を主張し東西奔走至于今日士官中議論二端其一は辭表を出し其國へ歸らんと主張其一は朝命を奉し不可動と云種々の鎭撫のものもありと雖も動もすれは一混雜を生せんとす萬一も先年長州の變動の如きに至り兵隊の變動を生し自然鎭臺に波及し諸縣も雷同するに至るときは積年の末今日に至り候事も水泡に可歸と此際不得不深用意于時山縣有朋と來會相談して薩兵隊の樣子を聞合せり其後福原一介野津少將薩人之處に至る聞得するところ近衞兵三分の二鎭定の論に傾き其二の下士官今夕異議の士官へ面會して存意を陳述し鎭定を謀る云々の事を報知す山田顯義も近情來話

山尾來訪歸便に右の云々を伊藏博文へ傳ふ

河瀨安四郎夫妻江川二老夫人澁澤喜作來訪同食

青木群平來話

兵士（籠頭）の政府上の議に關係し是非を論し强て進退を謀る等實に未國其國の體裁を不爲實に慨歎不堪なり

同廿九日　晴又雨木梨信一野村素介鳥尾小彌太白根多助平岡兵吉北川正誠來話

福原一介今朝野津少將の處に至り昨夕下士官異議士官に面し其末野津の處に至り議論に服すと雖も一旦辭表を出し又俄に其節を改むるに不忍依て三日の後熟考する云々の趣を報せり士官今日皇居へ召さるゝよし

田中戸籍頭よりの報知には土州兵士へ波及種々暴論主張雖然何の譯何の名あるを不知ものどもなりと垣板も鎮靜すると雖も不聞入ものも多しと形勢により再報の筈なり

過日流說に板垣云々あり今日板垣の說反對なり尤今日の說眞ならん

佐畑健介來訪

同三十日　曇野村素介宍戸璣新庄半之允有地品之允遠藤謹介長與專齋安市之允嶋田助七來話

福原一介來て近衞兵隊紛紜昨日已來の模樣を報知せり

森寺常德來て「」の云々を報知せり田中健助よりもまた報知を得る

山縣素狂來て兩三日の形情を談話稍鎭靜の報を得しことを語れり

兒玉淳一來話

高輪公より來書を得る

西村茂樹來て華士院を建るの草按を持參せり（余過日元老院を開き國家維持の具とせんことを欲し茂樹に語る依てこれを持參せり）

余去年西鄕參議の元帥を兼るを聞一時の謀計と雖も必後來の患害あら

んことを憂ひ不忍默止忠告の書を井上山縣へ送れり然るに果して今日此難事あり實に一新已後の一變動なり兵隊廟議を論し氣隨に辭表を出し廟議を兵隊に漏洩せしむ其責も亦雖不輕終に如此形勢に至り兵士不知重法文官不知判文武然して欲求文明實に木によつて魚を求むるものゝ如し豈可不歎哉

同三十一日　晴杉浦弘藏岡儀右衛門伊勢源藏來訪
野村素介杉孫七郎小幡彦七來話
福原一介來て兵士の又昨夜來樣子一變し終に不可止の形勢に至ると云免官の徒煽動するものありと雖たとへは西郷隆盛辭職するときは近衛の士官等己の本職を忘れ氣隨勝手を以猥りに其職をする天子の親兵たる如何を不知政府及全土億兆を保護する如何を不知陸軍省も未根本確として動ざるの處に不至慨歎長息の至りに不堪

同十一月、晴河瀨安四郎太田左門岡竹城來話谷口尙起來て司法の事を語れり
伊藤博文來て政府の近情其他云々の事情を談せり山田顯義來話元老院の一條に付來る四日、茂樹同行高輪邸に至ることを談置せり嶋地默雷來話
同二日　晴杉猿村來話山縣素狂來て陸軍省中の情實より及心事を相語れり且薩士官の强て辭表を出し歸國紜々不得止のことを聞慨歎不少鳥尾小彌太よりまた陸軍省中の事情を聞けり池田寛治野村素介野村靖之助井上勝青木群平宍戸璣山本淸十郎來話田中光顯より近情云々の書狀を得る
同三日　晴天長節なり萩原三圭井上因碩平岡次郎佐畑健介靜間謙介來話
同四日　晴谷口起、來話鳥尾小彌太杉孫七郎島田助七兒玉淳一郎青木群平來訪ホフマン司馬、長與專齋來診今日初てエレキを用へり

宍戸より司法云々の書狀を得り

同五日　雨山田市之允來て昨日於高輪邸元老院を起すに付此度企し集會に西村茂樹を以各國議院の體裁議員の義務等を説明せしめ先其始を作さんす然るに余爲病不能行依て山田へ依頼す故に來て昨日の樣子を談話せり田中不二（文部三等官）來て獨逸敎師御雇に付青木より申來りし事に付過日田中へ相通し置し譯に付來話

谷口起孝來て陸奥よりの傳言を告く井上因碩杉孫七郎吉松平四郎木梨平之進小幡彦七佐藤寛作宍戸璣野村素助平岡平吉野村和作來話小幡佐藤木梨吉松泊せり

佐藤（籠頭）井上と圍碁不覺井上の器量佐藤先白石とり二面敗績終に四目にして又二面敗績し然して悟不尋常一奇談也

同六日　晴森寺邦之助條公再度の御辭表に付内談に來れり

東伏見宮來臨高輪從三位公元清末公御父子御來訪

兒玉淳一郎岡竹城小幡彦七佐藤寛作木梨平之進福原恭助野村和作橋市

大岡大眉來話

同七日　晴河瀨安四郎來訪西岡逾明横山孫一郎來話皆時勢論なり

一字過吉村新九郎來り港説を報せり

主上御馬車工部省の溝中に落入驚愕の異聞あり依て直ちに人を走らせ急に其樣子を窺ふ然して片時も不能安堵折柄杉浦弘藏とブルックスと來訪大略を承知し漸安堵せり無間伊藤博文より報知を得心思始て靜まれり今日　大宮皇太后の兩宮高輪邸へ御下臨の折柄馬車堅棒折れ馬車馬尾に迫馬驚走して溝中に落一馬忽死恐多くも溝水御肩に溢れ實に危難際に有之し處騎兵其外必至に力を盡し御補助申上一應工部省にて御休憩御召替被馬遊御還幸ありし也實に御不幸中の御幸再思するときは不覺寒心なり

榊謙雄と申仁書面を持參せり

ホフマン司馬來診左足へエレキを用へり川北義二郎馬屋原　　を同伴せり杉孫七郎來て今日御危難の御樣子語れり

那珂道高來話曾て桂太郎秋田へ勅使に隨行し官軍にありしとき那珂敵の使者として勅使に謁見す此時彼を殺さんことを計りし事あり今夜不圖相會し語舊時談及于此互に開胸襟又一事なり

同八日　晴伊藤寛齋來訪井上因碩木梨平之進佐藤寛作小幡彦七淺間鐵之助杉山耕太郎池田寛治鳥尾小彌太吉松平四郎來訪

肥田濱五郎田中謙介より書を得る寺嶋伊藤兩參議へ書を送る

同九日　晴伊藤博文來て左の件々を相談せり

島津久光の事　副島御遣方の事

朝鮮論の事　福岡島本の事

兵部省の事　文部省の事

近衛都督の事　北海道へ君側兩人御遣しの事

魯國談判之事　內地旅行の事

內務省の事　青山判事の事

立法行政論の事　三條公の事

近衛都督を余に可奉命云々あり余先年來文武の判然せざるを憂へ余の論を陳述せしこともあり依て雖命難奉を辨せり

ホフマンのすゝめにて外氣に觸るゝをよしとす依て染井別莊え微行せり小幡彦七杉孫七郎佐藤寛作木梨信一奥平一介山田顯義等來話

森有禮留守へ來り一書冊を贈れり新庄七之丞來話

同十日　晴宍戸璣河瀨安四郎木村源三山田顯義岡吉春杉孫七郎長與專齋佐畑健助島田助七來話ホフマン司馬來診エレキを用へり米留學生服部一三孚書記青木より書翰到來

同十一日　晴國貞廉平林半七佐藤寛作三浦五郎野村靖福原恭助兒玉淳一郎淺間鐵之助翁庵來訪島田助七平原平右衞門同伴せり小畑餅山來話

同十二日　晴佐々木高行來て近情を語れり

奥村晴湖福地源一郎（キリシヤの古金を持參せり）佐藤寛作井上因碩吉松平四郎遠藤謹助夫婦木梨平之進山尾工部大輔山本清十郎嶋田助七來訪

伊藤參議勝參議來て政府の近況等談話伊藤參議陸軍省の云々に付余より山縣卿鳥尾少將へ論諭せんことを依賴せり余亦西郷參議此度の擧動當人は其心なしと雖も曾て薩州の形情により人心屢方向を動す漸辛未一昨年の歳同心合力朝廷を補佐するの論相決し終に廢藩等の運ひにも至れり實に此前の苦情不可堪言ものあり然して又今日西郷の擧動よりして法亂し律破れ其毒不少前約皆水泡に屬せり余亦人也不平滿腹雖然此際不能鳴不平政府の利害と人民の安不安深察するときは又枉て伊藤の説も不得不助依て沈思不覺移時

吉田右一郎への一書高杉小忠太への一書（此便谷梅之進稽古料として金子百兩及衣類等悉皆桂の便に託して送れり）等相認む

今日二字頃より凡十一字過まで不得寸暇腦病の再發を覺ふ

今夕司馬來てエレキを用へり

同十三日　晴桂太郎柴田家門今朝より歸省せり木村源藏杉孫七郎兒玉少輔殿川碇島地默雷來話

鳥尾少將山縣卿昨日の云々に付數字間談論また不得止の情實あり雖然內外の區別と事實の輕重を陳述し余の按を盡せり然して事の安着に至る甚難し

山田顯義來て公事を談せり小幡餅山身上論に付又多少の余苦情あり

林三介來て（以下三行欠）

免職の徒國の耻辱を不知己の耻辱を不知不平心よりして種々の流言をなし世人を煽動し天下の患害を釀す痛歎の至りなり參議の重職を勤めし人々も此輩不少國家無人實朝廷の大不幸也

（籠頭）此前來話と認しも多くは公事なり

同十四日　晴岩倉右大臣來訪政府上の云々相談あり長與專齋山縣篤藏小幡彦七宍戸璣藤井八十衛來訪木梨信一來て伊藤博文よりの傳言を傳ふ司馬來てエレキを用へり伊藤博文よりまた書狀到來魯公使應接唐太談判等云なり

同十五日　晴兒玉淳一郎吉本新九郎山田市之允鴻雪爪杉ヽヽ耕太郎平岡兵吉山尾庸藏來話

田中戸籍頭より士士官歸國云々得報知藤井八十衛來話

同十六日　晴木梨信一瀧彌太郎山本清十郎林半七來る廿日より九州に至る陸奥ヽヽ、明日より豆州熱海に至る佐々木高行西岡逾明來話

田中戸籍頭より書狀到來

笠原團藏小幡彦七來訪

同十七日　晴河野敏鎌司法大丞來話彼の議論實に正直にして土州人士中の第一等也當時政府の變換に隨ひ或は不平を鳴らし或は人心を煽動するものあり其間にあつて職掌を確守し一點の私心をおかず依て一省中の方向を維持するの力不少

伊藤博文來て岩倉右大臣の內意を傳ふ則大藏卿兼奉職云々なり余固辭如前日

ホフマン司馬盈之來訪

杉孫七郎兩度來訪

同十八日　晴河瀨安四郎石田榮吉伊達五郎横山孫一郎來話

杉孫七郎小幡彦七佐畑健助來訪司馬來てエレキを用へり

同十九日　晴木梨信一三浦五郎島田助七來訪

黑田開拓次官來て唐太魯人の所業及從來同人示趣等吐露談論余亦考按を陳ふ

平原平右衞門先年彼を信用し余の預りし公金貸與す然して後彼蹉跌し前約齟齬違背余亦多少の辛苦あり依て島田助七先年來周旋し漸返濟の

次第を立て過日來々て前罪を謝し今日も明日より歸坂の暇乞を告けり

中野健明來訪同人來る廿五日より佛國へ出發せり（佛國公使官書記）

三條公御進退に付御相談云々申來れり

同廿日　晴　平賀俊藏山田顯義天野清助井上彌吉小幡彦七野村素介鳥尾小彌太久米邦武來話

伊藤博文より政體上の事に付余の考按を尋ねり依て政體上而已變換して其形美麗に相成候とも人智懸隔所詮俄に歐洲文明の政府の如き事は實際六つケ敷に付輕舉率行の弊を防ぎ制令に齟齬せず總て着實に歸し候處を只祈るとの主意にて及返答二三の考を陳候

一　會計裁判（クールトコントの如き也）

一　國議院（コンセーデターの如き也）

一　司法省と裁判處と被分候事

一　教部省を被廢社と寺との寮を内務省中へ被置候て可然歟と相考候事

一　官員（諸省地方）撰舉偏頗に相成候弊を防くの方法（正院の約束に可有之歟）

一　太政大臣右大臣内閣議官當時は立法行法の權を束有すると雖も他日是非元院下院の二院は不被差立ては不相成に付他日可被差立の譯を以政府體裁中へ二院の名は被定置度事

一　建國の大法はデスポチックに無之ては相立申間敷（是には愚按有之候）外に教育（一般）と兵制は容易にデスポチックは被止不申候

一　待詔院

是は名は何にてもよろしく候有功の士或は積年在上官し人の退職後元老院中へ被加度事なれども未元老院を被設候處に不至故暫如此ものを被置候方可然歟

いづれ建國の大法確定不致ては大政府也地方也全備の良法は無覺束候事

同廿一日　晴河瀨安四郎池田道三長與專齋小幡彦七木村源三來話

昨日使節事務局よりクロッブよりの贈物を爲持候事

同廿二日　晴政府體裁上取調らへに付歐米の美麗なる體裁を外面而已模似するとも人民の智愚懸隔し今日の形情と離絶して實際に不適ときは却て人民の不幸國の損害も生し便ならざるに付務めて實際へ着目し輕行卒擧を戒め漸を以開化文明の域に進歩し馳形て實を不誤樣有之度尙又愚考を伊藤博文まで申越置候事

田中戸籍頭より土州紛紜に付一書差越候事

十一字より染井別業に至る奥平二水青甫等同行一泊せり平岡兵吉來話

同廿三日　晴十字頃より染井近傍の植木屋二軒富二郎高力に至り菊花を一見し直に平岡に至る小幡奥平同行なり遠藤謹助亦尋來る五字より歸り杉孫七郎を訪ひ七字歸家山田顯義來話身上相談せり

同廿四日　曇越前人狛林之助宇部の藤本盤藏兩三日前英國より歸り來訪せり芳山富田二氏之書狀を落手せり後藤象二郎來訪談近事

中野　明日横濱發船佛國へ罷越候付鮫島辨務使兼松鈴木兩書記

檜崎賴三孛國青木周藏品川彌次郎英國芳山五郎之助息正二郎への書狀を託せり

同廿五日　晴嶋地默雷靜間健助三戸茂內來訪

三浦梧樓へ陸軍省中の事に付必竟全國の公益を思ひ愚按を陳述せり山田顯義之事關之

同廿六日　晴河瀨安四郎木梨信一來話過日中井弘藏歸朝上野外務少輔と來訪魯西亞と當時應接の一端關係云々を承得せり

鳥尾來訪昨日三浦へ談せし如く只管全國の得失を不忍忘愚意を陳述せり司馬來診昨日來脉數九十餘

同廿七日　晴野村素助戸田三郎嶋地默雷大洲鐵然木梨信一木村源三杉山耕太郎山縣狂介小幡彦七山本清十郎來話

伊藤博文より來書

同廿八日　晴平岡兵吉中村芳三郎毛利恭介戸田三郎杉孫七郎來話

田中文部少輔來話海外留學生徒を擧て歸朝せしむる云々に付愚存甚不好依て其趣を陳論せり且文部事務に付二三の愚按をも談せり

毛利從五位殿來訪過日防州德山より山口萩及下ノ關に至り今日歸京のよし御噺しなり

河瀨安四郎の處へ高輪

從三位公御出の由にて預招三字過より到于河瀨折柄柏木總藏足柄縣令も出京面話せり

昨日山田顯義宮内省へ召あり二字

主上出御岩倉島津德大寺も侍坐然るに山田談時刻參伺せず

依て山田顯義を宮内省より尋しむ使誤て余の宅に至り急に可參伺可致云々を傳り余甚怪む杉宮内大丞へ尋ね始て知其實右の一條に付山田恐入候段宮内省へ可申出方可然と愚按を申述へり

同廿九日　曇河北義次郎來話山田顯義支那行云々なり河瀨安四郎島地太郎由良源太郎來話十二字過より杉孫七郎の宅に至る小幡餅山別杯なり奥平二水岡義右衛門來集柏木總藏楫取素彥亦來會九字歸寓于時雨

（鼈頭）青木周藏より書狀到來

同三十日　曇又雨又晴伊藤博文より來書

楫取素彥轉官に付古賀某後役に付柏木苦情云々河瀨よりも申越當人よりも承知候に付申越置けり

昨日伊藤より來書に士族祿制未決に尙又祿稅を加ふるの朝議決せりと元來稅を課するは歳入の不足なる故なり然るに大藏卿大隈歳出歳入に比すれば有餘と天下へ公布し今俄に祿稅を無故發令あるは天下これを何と歟言わん願わくは基礎一定し歳入歳出の大算一定あらんことを建言せり

伊藤博文來話朝議近況を大略承知せり余に又陸軍卿の内諭あり余平生の持論と大に齟齬するものあり依て余甚困却且過日西郷參議歸朝云々等に付不得不發言の情實等あり告思如山

木村源三中井愛藏鳥尾小彌太來話

小幡餅山過日發途暇乞に來れり谷口來話

十二月朔日　晴長與專齋來訪杉孫七郎の招にて濱丁の御屋敷内御見物に至る來會するもの柏村數馬與平二水永安和惣周旋せり學儕も亦來話

八字頃歸寓山田顯義來話

同二日　晴那珂通高來話

谷口起孝吉松平四郎馬屋原〻來訪

高辻侍從　勅使として病氣來問蘭〻、二鉢拜戴

司馬盈之來てエレキを用へり山田顯義野村素介來訪

同三日　晴十字過より外出途中三浦梧樓に逢ふ共に染井別莊に至る奥平二水亦來會四字去て柳澤の舊邸を一見し其より杉孫七郎を訪ひ談話數字九字過歸宿

伊藤博文留守へ來り要件數條を認置けり

杉孫（籠頭）七郎へ外衣を贈れり

同四日　晴西岡逾明來話原田吾一高橋勝政來て陸軍の事を話し田中不二麿野村素介來て文部の事を話し河瀨安四郎來て柏木縣令云々の事に付談話し飯田吉二郎蘭より歸り來話楫取素彦岡儀右衛門來話

那珂通高來訪文章の事を談せり

司馬盈之エレキテルを用へり

井上新一來訪山縣狂介來て陸軍中の事情を語れり

同五日　晴戸田三郎來話余昨日一書を送り同人を勞し（戸田は寺島と一同歐洲より歸れり）寺嶋參議へ一論に及へり其故兎角政府の改革只美麗而已をもとめ海外留

學生も曾て留學せしめし元因もまた政府の自ら策を失せしも不顧玉石混淆一時歸朝せしむるの論屢起り余爲病に一々其人に議する不能依て過日來書を以て其不可を云然して其言更に不徹寺嶋も其論を主張するの一人なりと依て此事に至れり寺島平生如此の獘を歎す然る當時在參議却て如此說を主張する余甚其言行を怪む

十字過より駒場の地所に至る興中の運動病身に益あるを覺ふ歸途佐畑に至る不在また河瀨縣令を訪ふ須臾相談す八字前歸家

朝河瀨安四郎晩平岡兵吉來話

戸田三郎より書狀到來寺嶋へ雖及一論事已に決すると實に可歎之至也

同六日　晴藤井八十衞來て廣澤異變關係云々に付內話せり

鳥尾小彌太山尾庸藏來話十二字後山田顯義を訪ふ陸軍紛紜の事に付內話せんと欲す折惡敷不在なり其より三浦五郎を訪ふ談話數時歸途杉孫七郎を訪ふ六字前歸家

今夜河瀨安四郎一家を招けり同人明日橫濱に至り來る九日の佛船にて歐洲へ發せり藝人數輩を呼ひ坐上の興助けり十一字歸家せり夫婦及伯母來席

青木周藏より書狀到來せり

三浦（艦頭）より椿山華山半江疎林の小帖を取歸れり

同七日　晴靜間政助來て一昨日相託し置きし士族減祿制の精算をなし持參せり

今日非祿稅議及減祿制等を合し伊藤博文を以朝廷へ建言せり有司多く名爭ひ功を貪るの弊增長數百年世襲の士祿を速急減却せんとす余これを憂ふ久し依て終に及此建言り

佐々木大判事來話司法中の云々なり

琉球浦添親方大宜見親雲上山本淸十有地品之允來話

青木周藏品川彌二郎學國檜崎賴三佛國芳山五郎之助平原太作息正二郎英國へ

の書狀を河瀨に托せり

十二字後平岡兵吉を訪數刻談話其より別業に至り歸途中島四郎を訪ふ

不在杉孫七郎を訪ひ八字歸家留守へ米人ブルックス來訪明日より米國へ歸しよしにて暇乞の爲め來れりと余一昨年來の交際世話に預り事も不少面會せさるを憾む依て姪彥太郎への一書を認め及其他馬車代を託せり（藤井政太郎明朝持參する都合なり）

山田顯義來話（陸軍省中山縣と議論云々）

同八日　晴宍戸璣森寺常德（條公の御身上云々なり）來話一字より染井別莊に至る（過日來腦中閉塞の氣味あり依て半日は勉て外出せり）

山田顯義宍戸璣來話中島四郎亦來今夜大火

高輪（鼇頭）公より書狀到來

同九日　曇山田顯義一泊せり朝平岡來て長屋造作云々の事を語れり十二字過奥平二水來れり四字去て歸家せり

同十日　晴柏木縣令來話（縣事云々なり）

谷口起孝來話（京都府裁判云々なり）藤井八十衞來て彼等職掌上の事に付司法へ關係云々を語れり山尾庸藏來話司馬來てエレキテルを用へり

伊達從二位來訪談話數刻今日秋（マヽ）從四位も相約せり終に無音なり

同十一日　晴參坐竹內綱（槇村參事裁判云々の事なり）戸田三郎（議院一條に付華族集會等の云々なり）來話三浦梧樓兒玉少輔來訪井上聞多今日西國より歸京直に來訪吉冨簡一も同行始て防長の近況を聞けり河北義二郎橫山孫一郎來訪秋月從四位昨日の相拶に來れり

佐畑の帶祝に至れり

谷口起孝木村源三留守へ書面を持參せり

同十二日　晴谷口起孝（裁判云々）高橋熊太郎（陸軍省中前途の目的云々）西潟訥（文部省中爲教育云々）來話杉孫七郎內海忠勝木梨信一池田道三來訪

中井弘藏より松村（マヽ）面會いたし度云々申越せり（松村米國のアナポリスの海軍學校へ入込終に昨年第一級の生徒となれり未皇國内におゐて外國へ游學せしもの未（マヽ）第一級に至りし人其人を以て始とせり）

同十三日　晴淺間鐵之助明日より長州へ歸れり平賀俊藏廣島鎮臺へ明日より出立依て同行せりと二氏告別に來れり（淺間過日李國より歸朝せり不幸にして肺病あり性質淳良實に可憐は不知快復如何）

今日三條公へ約あり森寺同伴十一字前牛込より乘船して橋場の別莊に至る談話數字八字過歸家留守へ伊藤參議來て書を殘し置けり（朝議云々なり）井上吉冨鳥尾等皆來訪

同十四日　晴横山孫一郎長與專齋杉孫七郎山本清十來訪

井上世外來話余再廟堂上に出諸省中の一卿たることをすゝむ云々時情不得止のものありと余の心中千苦萬辛不堪ものあり其所以今日の朝廷無威無權々々々所以のものは薩長主とし政府を一新し隱然占權るものあり政府の法不被行は必竟薩長人等の大罪なり三年前漸薩長及土合して兵を政府へ獻し廢藩の體裁稍定まるも始て此所に注意するものに似たり然るに今日又薩人等暴力政府の法を破り土人等も亦隨て破法然して今日の勢不能糺其罪余窃思ふ余譬暴客亂徒の手に死するとも爲後世人民糺其罪天下の人民をして慕法思法の心の生せしめ法以て終に人民を保護するの基を欲助然して遂其志尤難く一人無應余又枉志勤仕する心甚耻之浩歎又浩歎

藤井八十衞廿日過より九州邊へ下る廣澤を暗殺せしもの探索の爲なり粗思ふところあり

（龍頭）森寺より書狀到來舊參議の云々あり

同十五日　晴伊藤博文來話（政府上の近況及政府體裁上の諸件なり）野村靖島地太郎來訪

長與專齋山田云々兒玉淳一郎代言社云々山田忠美身上等來訪原田儀右衞門來る加藤謹一郎借金一條なり青木郡平來話（明日より出立せり）

河瀨の招に預れり五字前に至り九字歸家

同十六日　晴　鳥尾小彌太木梨信一山田顯義山縣狂介來話三字過ホフマン來診司馬同行なり

同十七日　晴　西北風甚烈今朝藤井八十衛來話久保名東縣權令藤井敦賀縣權令へ書狀を出せり十字より染井別業に至る平原及植屋留五郎の處に至る于時吉冨簡一內海忠勝等尋來る二氏終に一泊せり

藤井（籠頭）八十衛九州行一條に付福井豐助來話

同十八日　晴　平岡來訪終日吉冨內海と娛戲森寺蘋香來話條公御身上云々なり吉冨內海また一泊せり夜平岡中島來話今夕奥平二水來訪

同十九日　晴　日暖風清恰如春日朝內海歸去與吉冨萩城鴻城及府下の近情を互に相話す四字前歸去其より散步して又植木及平岡の圃園を散步す聊醫師ホフマン及長與專齋などの忠告を用へり暮時奥平二水來る

同廿日　晴　朝平岡來訪奥平二水兩氏と道灌山を散步し一時歸莊河瀨夫妻福井順道井上因石來話河瀨井上皆一泊

同廿一日　風烈　河瀨井上皆歸岩倉大臣來訪祿稅論と余に出勤の談あり祿稅論は持論を委曲及陳述り然るに不言道理急に祿稅を布告し他日又減祿の制を立る云々の說あり余甚不可を論す其譯は祿稅を課するときは祿を則士人の所有物也所有物なるときは政府をつとめて保護せすんはあるべからす然るに又再減祿の制を立る實に政府の不信不義人民何以政府に依賴するものあらんや哉と然して余の稅に不決不聞道理實に浩歎之至也三字過杉孫七郎來話森寺常德來て三條公邸へ昨日　臨幸あり明日御參仕云々に付內命を以相談に來れり依條公

臨幸の上厚き詔も被爲在候處を以一應速に御參仕然る上過日來の心事列坐の上にて御陳述必竟諸參議の如願被免候も其條理は條公の說を助けし都合也然る時は條公は其頭主に付ては一應御辭職更に御親任も被爲在候へは改て御奉職に相成候ときは事不屬曖昧之至當と致愚考せし

に付此事を縷々陳述に及へり爾他近情を談す

夜雨

同廿二日　晴天野清三郎過日米國より歸朝屢留守へ來訪今日別莊へ尋ね來る種々談話せり

三字後井上世外來訪又余に出仕を促せり余屢屈說曲議不能得閑此節は欲達其志然るに今日薩摩の分營放火其際も亦瓦解の說あり然るときは將來の形勢難圖見難而不能退故に又今日の形勢に隨ひ斷然其難きに當らんと決心せり

（籠頭）青木書狀到來戸田より華族懶惰云々申越せり

時勢に付建白書を〻〻より出せり

同廿三日　晴與二水近傍を散步せり山田顯義來話陸軍省中の云々に付愚意をも論述し置けり四字過出別業訪中島六字歸家夜山縣鳥尾に至る

同廿四日　晴二字後伊藤博文來話（近情云々且余の奉職云々なり余元より當雖敢て毫も辭避するの心なし雖然尋常の時に當りては今日奉仕する不可言の苦情なり）

中井弘藏松村〻〻藏來訪同食せり近日の薩情及其他の事を談話せり森寺來話三條公御進退云々なり依て愚情を陳述し置けり

（籠頭）今朝內海大坂へ歸れり依て小帖四の表裝を賴めり

同廿五日　晴昨夜微雨山田顯義來訪山縣狂介鳥尾小彌太亦來話山田の談にて今日中島四郎の宅にて故大村大輔の吊あり依て余亦連席原田道一長嶺豐之進他は山田と余而已なり其より別業に至り一泊す山田中島來話山田終に一泊せり

（籠頭）此夜伊藤より書狀到來

同廿六日　晴後庭の茶園へ杏梅數十株を植へり二字後山田歸去四字頃より余亦歸宅

今朝中島の案內にて山田と近傍の地所を一見せり

同廿七日　雨井上世外來訪薩州の分營瓦解肥後分營亦紛紜の說あり故强

て余に奉職の儀をすゝめられ余亦時勢如此不得止行かゝりにて含垢枉志暫文部卿を奉命せんことを答へり大藏卿陸軍卿司法卿云々あり皆固辭せり島地默雷佐畑健介宍戸璣來訪

同廿八日　狛林之助來訪（吉敷へ養子云々に付内談せり）桂太郎山口縣より歸れり十一字過より杉孫七郎を訪ひ彼近傍を散歩せり十字歸家

同廿九日　晴小室新太夫來話近情云々を聞取せり且正二郎の左右をも承知せり

鳥尾小彌太山尾庸藏竹田庸二郎來話（山尾は明日より長崎へ出張すると云）島地默雷來訪吉田右市郎（山口縣參事）頃日出京來話

三字頃より木梨信一を訪ふ不在奥平二水吉田右一郎も同行留守にて碁を圍めり信一亦歸來る共に又番丁へ同行木梨吉田一泊せり

伊勢小淞より書狀到來條公の内書もまた到來せり

同三十日　曇諫早清二郎遠田甚助天野清介木村源藏山本清十福原市介福原恭助山田顯義井上因石井上新一來話

條公へ昨日の答書を出せり心事縷々陳述し置けり

明治七年

明治七年一月朔日　大雪槇村半九郎來訪裁判所云々漸三十一日裁許に至れり彼の心事可憐もの不少杉宮内大丞來訪爾他賀客多々夜鳥尾小彌太來話圍碁

同二日　晴山田顯義山本清十郎山縣狂介野村靖長松文輔林董戸田三郎杉山耕太郎廣澤節三（故參議の家の養子なり）井上因碩井上世外家内來訪爾他賀客如山

今朝森寺常德來話其所以は去三十一日大臣始會議の節條公十八日前へ復し頓に評議云々の說ありと　朝命苟如此輕卒のものにあらず必雖條公主意ありて起其說ならんと相察し衆參議懸念の處ありといへども余は決て不疑依て三十一日の夜森寺を招き内意を條公へ陳言す果して衆議の聞くところと其主意大に異なり却て岩倉に齟齬あるに似たり

槇村半九郎來話心事を陳述し前途の目的を失し西京人民の上にありて支配するを慙る所以の陳情一冊を持參せり余昨日慰諭するといへども當人の情實に不得不貫依て政府の主意を寛ひ然して彼の去就を欲語

同三日　晴十字前出門長與專齋を訪談話數刻其より染井別業に至る杉孫七郎奥平二水井上因磧來話杉の外二氏は一泊せり

槇村の陳情え一書を添へ伊藤博文へおくり廟堂諸彥の定論をもとむ

平岡通禧中島四郎來訪夜平岡と中島に至る

同四日　晴伊藤博文より來る七日に出勤文部卿拜命の事條公より御傳言の趣申越せり

五日過歸家式部寮より來る七日參仕の事達しあり史官より熊本鎭臺暴動の報告白川縣より出せし寫しを廻せり

高輪從三位公より御書面及鴨一籠御送り被成候

木梨信一兒玉淳一郎來話皆相泊せり

長與專齋來て文部の事を談せり

同五日　曇西岡逾明來て政體上及此度槇村裁許の云々等を談せり田中不二麿文部省中の事務を談せり

今朝七日に病氣に付難致出勤斷を式部寮へ出しまた三條公へ一書を呈し七日の斷と槇村一條及過日余の心事を縷々陳言いたし置し御返事を乞へり

鳥尾來訪

同六日　晴大木參議來話兒玉少輔來訪木村源藏明日より歸京に付槇村へ一書を投せり河瀨殿衞來話（同人內務省へ出勤云々なり）柏村數馬野村素介鳥尾小彌太來話

同七日　晴兒玉淳一郎靜間謙介來話皆近日の時情なり肥後人山田武甫來話（肥後鎭臺其他九州邊の形勢不穩趣を縷述）

伊藤博文森寺常德より來翰吉田宇一三浦梧樓山田顯義作間一介來話爾

他至當年來客如山

同八日　晴横山孫一郎來て近情及近時外國新聞の數件を語れり戸田三郎より來翰過日來同人と相談せし華族會議の一條に付高輪從三位公御出席云々なり則此會を以他日上院の基となさんとす余歸朝已來麝香間詰有功の華族をして此基ひを起さんとす欲し種々盡力すると雖も皆老衰にして志氣なく不得止一般の華族に圖り欲企此事而して戸田亦此志あり依て終に至于此

長與專齋來て文部省中の事を談す○林三介來て頃日ホリス沸騰云々を語れり今朝横山の話に符合す杉孫七郎來訪

同九日　晴戸田三郎來て華族會議云々を語れり西岡逾明來て憲法云々の事を談れり山縣狂介來て肥後鎮臺及薩分營沸騰報知の始末を語れり山田顯義亦來話四字伊藤博文來話ホリス彌破裂に至ると云其元因副島の煽動より起ると云

同十日　晴三ノ村（の）ヽヽ來て世上の近説を語り彼の按をも陳述せり田中不二麿來て文部の事務を談せり福澤諭吉來て時勢を談せり兒玉淳一郎も同道なり長與專齋來て文部省中の事を語る

今朝後藤雲濤より書狀到來彼の曾て出せし辭表の草稿を示せり

河瀨縣令（今日内務へ出仕の沙汰あり）佐畑宍戸來話

同十一日　晴天十字前より高輪御邸に至る（先日より屢御招あり）午饌の御饗あり杉宍戸野村木梨國貞伊藤柏村山田等同席御夫婦樣及德山清末吉川の御三末皆御一席なり余不堪長席半より席を辭し御母堂樣へ窺へり今朝戸田三郎より華族集會議院設立之主意等を認めし規則等を送れり依て持參し從三位公へも御目に懸け爾後御出席有之樣御すゝめ申置けり

四字頃より辭去再柏村へ至り直に山尾留守を訪ひ伊藤と約束あるにより伊藤の宅に至る今日高輪御夫婦樣も御招き申せり山田顯義も亦來れり共に一泊す

同十二日　曇十字過去て山尾に至り直に歸家せり

從三位池田茂政三浦少將木梨信一兒玉淳一郎安貞成來訪兒玉へ代言社の事を相談し置けり三野村マ、來る預け金を持參せり夜雨

同十三日　曇平岡兵吉來話伊達從二位來話先達て來余華族の素餐を患ひ種々盡力し且伊達は華族中の老功依て屢相責む頃日大に奮發大に華族を鼓舞せんと欲し元越前老公等申合せ規則を立華族一般の集會を起さんと欲す規則を賴めり余亦隱然不堪欣喜○横山孫七郎來訪田中光顯より來書山縣素狂鳥尾小彌太山田顯義靜間謙助來訪

森寺常德條公の內命を以て來れり今日戸田三郎從三位公へ面謁の事に付柏村へ一書を投せり

夜宍戸璣を訪ふ

河野龜之（鹿頭）進頃日歸朝芳山冨田佐々木及正二郎の書狀を持歸れり

宍戸より石部錄郎（マ）書狀を落手せり

同十四日　曇昨夜來雨杉孫七郎來訪兒玉淳一郎來話杉再來訪夜半森寺常德より書狀到來今夜八字頃岩倉右大臣皇居より退出の折赤坂食違にて狼籍もの數輩馬車に迫り右大臣手疵を受られ候趣申來る無間林三介來て此次第を又報知せり余も徹宵起坐

岩倉（鹿頭）へ直に小野勝三郎を遣せり

同十五日　曇森寺常德來て昨夜の事情を報せり田中光顯來訪下連城來る吉川邸云々なり杉山耕太郎來訪新聞紙の規則に付愚案を文部省へ申出せり三浦梧樓來話昨夜の一大變等に付實に天下の形勢を慨歎し涕泣相語る彼の誠心不堪感也余亦勉病推て正院に至る然る已（マ）に大臣參議皆散依て三條公に至り又工部省に至り伊藤博文に面會し直に又大久保利通を訪ひ意見を陳述す皆無異論七字歸家杉孫七郎福原恭助永安和愈山田顯義河野龜之進來訪其他來客甚多々留守え今夕高輪公も御出ありしよし野村素介書狀到來

山本（鹿頭）清十郎再來訪同人の國事へ心を盡す實に可感なり

同十六日　風雨山縣狂介來話山口縣の人にて佐々木要太郎と申もの始て來訪此度の一大變を慨歎し同志のものども余の宅に來て危急に投じんと欲するの心事を陳へり余其厚志を謝し今日の事余一人の事而已にあらず願わくは益同國の同志と共に國難を救ひ萬民を保安せんことを答へ置けり

井上世外陸奥陽之助來話

大久保森寺等へ書狀を送れり大久保も餘程決心にて云々の返答あり平岡兵吉來泊

多客如山

同十七日　晴田中光顯河瀨殿衞宍戸璣來話今日板垣退助と面話の約あり十字過より濱町の邸にて會話せり同氏の心事を承知しまた余の意見を陳述す五字歸去せり

奥平二水來る共に一泊せり

佐々木要太郎同志西田榮太郎と申ものと迎ひに來れり

同十八日　晴三條公早朝御來訪昨今の事情に付縷々御内談あり依て愚意數條陳述せり十二字後小室信夫來訪昨日板垣の談せし副島其外民選議院に付上書の談話を了承せり云々の情實あり

森寺大久保伊藤の書中の岩大臣へ對し及狼籍し土州人數名捕縛の事を報せり四字過歸家田中光顯（司法省中の事に付河野傳言せし言あり）三浦梧樓山本清十郎林三介等來話

横山孫一郎來る一萬（以下欠）

同十九日　晴戸田三郎（議院の事なり）靜間健助山本清十郎（ホリスの事なり）山田顯義吉田宇一木梨信一（ホリス云々なり）來話田中不二麿野村素介（兩氏文部の事なり）陸奥陽之介瀧彌太郎林三郎杉山耕太郎兒玉淳一郎河野龜之進等來話爾他客來如山

中島四郎（縫頭）西岡逾明

同廿日　晴宍戸璣陸奥陽之助森寺常德島地默雷杉孫七郎靜間健助來話皆

今日の情實に付云々の談なり

同廿一日　晴井上世外來訪明日より浪華に至れり今日の形勢に付余に出勤を促せり板垣退助小室信夫來談彼等の頃日民選議院を建白せし一條に付又意見を陳述せり三浦梧樓鳥尾小彌太田中光顯靜間健助來話一字過より染井に至り歸途ホフマンを訪ひ診察を乞へり桂太郎同行せり

昨夜山田顯義佐畑健助來話山田一泊せり又今夜も來話

昨日久保名東縣權令へ一書を出せり

同廿二日　晴有地品之允南貞助吉田宇一井上因碩等來訪

四字より大久保に至る近情今日の形勢また西鄉參議等歸國の元因其より前の事等無腹臓談話夜十二字頃歸宿于時牛込神樂坂大火○井上吉田一泊

同廿三日　三條公來話（島津隱居云々なり）山田顯義戸田三郎伊藤博文長與專齋三野村利右衞門山縣狂介林三助瀧彌太郎鴻雪爪野村靖來話元長岡藩の士族にて先年戰爭の際尤盡力其後主謀の責に當り朝廷に被囚其後また寬大の御所致に預り當時は閑散にて有事の際平生一面目をそゝかんことを期し今日爲天下盡力するの志あり依て大久保にすゝむホリス等も五十名精選して出すと云今日瀧と同行せり依て面會す

三條公大久保より書狀來る

（鼇頭）先夜の賊徒終に其確證の逐々擧るを聞得たり

同廿四日　晴三浦梧樓兒玉淳一郎來訪谷口起孝來話

英公使パークス來話サトー同行なりホフマン夫婦司馬盈之等を招き共に晩食せり

杉猿村來泊

同廿五日　晴三刀屋七郎次安野彥四郎來訪今十字參　朝

御直に文部卿兼任の　勅命あり余時勢の紛紜に際し不果宿志終に奉命せり雖然病亦未全癒依て日々出勤は御猶豫の

叡示も拜承せり

狛林之助内海忠勝の書狀を持參せり

三浦梧樓夫婦及妻妹を同伴來訪せり過日來桂太郎の配偶に相談せり依て此事あり

木梨信一來泊

同廿六日　晴又風河内直方阿武素行三刀屋七郎次來話（山田警保の關係云々あり）

拜志豐槇來訪（元大津藩の士族なり）鳥尾小彌太林三介杉孫七郎來話山尾庸藏昨日長崎より歸京夫婦來訪

四字より上野へ展覽場に至る（松源及辨天馬場の茶店寺院）余所持の銅餅曹學詮、張秋谷及竹田半江等皆屬上品歸途松源にて一酌す山田木梨三刀屋奥平同席

八字頃歸家此日始て試英馬車野村素介木梨信一山田顯義來泊

同廿七日　晴始て文部省へ出省田中少輔其外局課の諸長官及奏判諸官員に面會す省務數件を聞承し二字歸家（出省の時野村素介同行歸途不圖宍戸璣と同車）三字頃宍戸璣來訪共に中通り邊へ運動の爲め散歩し骨董數店を經過しまた杉猿村を訪ひ（家令野原友之進異事あり）七字前歸家此日風甚寒

同廿八日　晴河野權大判事來話三浦梧樓靜間健介佐世彌藏來訪山縣狂介と招魂祭に付角力の興行あるを一見す山田顯義來訪

三條公より書狀到來省務に付田中及書記より書類到來

同廿九日　晴谷口起孝來話（京都府事なり）河野權大判事へ一書を送れり三條公より書狀到來岡義右衞門來訪三字頃より板垣退助を訪ひ過日來談話の次第も有之於政府當時詮議するところの縣官集議（各縣民會等を企る趣向等相語れり）歸途中井弘藏を尋ね其より三條公に至り談話數刻七字前歸家山尾庸藏來話

同三十日　曇又雨兒玉淳一郎西潟訥野村靖森寺邦之助田中文部少輔陸奥陽之助河北俊介鳥尾小彌太河野通信三野村利左衞門佐世彌三來話

今日田中へ（籠頭）此度歐米書生を一旦被返候に付其主意書を公布すること

を談せり

同三十一日　曇野村素介長與專齋平岡兵吉島地默雷來話

四字過より大久保に至り今日御所致の末終に目的の歸着するところを談論し爾他數件を吐露す（唐太人選ホリス等）七字歸家夜雨

今日野村靖へ託し孛英伊米へ書狀を出せり

二月一日　晴三條公大久保より書狀到來十字より染井別莊に至り其より與平岡中島を尋ねまた平岡に至り宍戸璣等と會し食後宍戸の別業に至る途中植木屋宮本等の園中を一見す折柄宮本〻、在宿酒菓を饗す五字前別莊に歸りまた中島に至り食事を認め七字頃歸家夜山田來訪

同二日　晴三浦梧樓來話伊藤博文山尾庸藏來話林友幸九州より歸り昨日來訪折柄不在今日又來訪薩州の近況西鄉老人等へ面會云々及九州邊の近情を聞けり四字より三條公に至る朝鮮一條の決末云々御相談あり七字歸家吉田宇一島地默雷鳥尾小彌太三浦梧樓來話

司馬盈之來話ホフマン一條なり

（鼇頭）吉田島地一泊

同三日　晴島田助七西國より歸京事情を語れり中金中議官建言書持參條公より北地及朝鮮一條に付御書狀到來伊藤博文より來翰

河瀨安四郎夫妻書狀セイロンより達せり支〻度海にて器械破損爲其着歐も餘程延引せりと

（鼇頭）三字より岩倉に至る人撰論及余過日條公へ願置し心事等陳述し置けり其より山田に至る同人新築にて宍戸野村奥平及余夫妻同食す吉田亦同席

同四日　曇又晴櫻井虎太郎（越後長岡の士族）過日建言書持參せり今日面會して其旨趣を承了せり實に其人となり沈着愛國の念甚深く先年一抗　朝廷天

下歸平定改心思忠可感の至なり山縣狂介來訪杉孫七郎來訪共に濱町邸に至る邸内稲荷社祭禮なり孫七郎と兩國近傍を散歩し骨董店に經觀せり再濱町邸に至り七字歸家浮田八郎も同伴し來る

佐賀（鼇頭）士族朝鮮論を唱へ三井組に入亂暴せし傳信あり佐賀始より爲天下無寸功害天下甚深

同五日　曇又晴岩倉具定來訪山尾工部大輔來話共に高輪に同行し邸に至り從三位公へ窺ふ其より山尾に至る伊藤余の留守を訪ひ余の高輪にあるをきゝ邸に人を馳せんとす余面會して近事を了知せり七字歸家今日病後始て蒸氣車を試めり

今朝（鼇頭）伊藤博文え一書をおくり余奉職後病氣未癒日々出勤も不得致此際心甚不安依て一應歸省を願ひ九州に至り其近情も欲探云々の意なり

同六日　晴今日岩倉にて會議あり臺灣一條なり廻しの書面に同意せり依て今日出會を斷れり十字頃より染井別業に至り平岡中島を訪ふ奥平二水も兒玉淳一郎來訪今日此門前に櫻樹十餘を植へり谷口起孝來話

山田（鼇頭）顯義來話

同七日　晴南風甚烈廣島鎮臺燒失の傳報あり吉田宇一郎來話ホリス增加云々なり萩原三圭來話杉孫七郎來訪十字過より有約岩倉家に至り談話數字杉山耕太郎河野通信島田助七來話

伊藤より兩度書翰到來九州佐賀凶徒蜂起云々なり

三條公より御書狀到來

同八日　晴大久保來訪九州騷擾に付内務卿の故を以急に九州へ出張し鎮撫云々の相談あり昨夜已に條公より御尋あり余大に同意せり尤余過る五日九州に至らんと欲するところの主意をも陳述せり故に大久保にかわり余急に九州へ下向し此一騷擾を鎮壓せんと欲し大久保にも相談せり然るに大久保是非内務卿たるを以急に下向せんと欲し自然時日遷延

するときは其害もまた不少と而して朝廷の議速に決する哉否を危ぶむ故に余大久保にかわり病をつとめ留守中其任に當り速に大久保下向の事の議決せんことを論す大久保大に歡喜して去

谷口起孝來話高輪從三位公御出あり柏木忠俊も亦來話十二字條公より御書ありまた大久保より今朝の一事に付速に決議あらんことを欲し余に盡力を申こせり依て余岩倉家に至りまた條公に謁し伊藤に逢ひ大意相談す故に大久保に至り其意を陳ふ大久保大に安堵せり

夜條公より再度御書狀到來

（籠頭）内務警視廳

同九日　晴三條公大久保より書狀到來河野權大判事來話杉孫七郎來訪十字過より參　朝大久保下向の事彌相決凡其手順を論せり佐賀騷擾に付昨日來福岡下關長崎等より數度傳報

退出直に文部省に至り歸途河野權大判事を訪ふ不在山縣狂介を訪ふ五字過歸家

三浦梧樓河野通信河北俊助來訪伊藤博文より書狀到來福岡長崎より佐賀の動靜に付傳報あり

同十日　晴又雨林三介有地品之允吉田宇一河野龜太郎山田顯義來訪櫻井虎太郎來話事情云々なり

大久保參議來て此度九州行に付内外の事數件を相談せり余亦愚按數件を陳述す尚九州の近情承得せり

（籠頭）山口縣地租改正に付評決の催促を大隈へ申越せり吉田持參

同十一日　晴木梨信野村靖杉孫七郎宍戸璣長與專齋谷口起孝吉田右一來話福岡縣長崎縣より佐賀暴動に付近情傳報來る夜三條公より急招あり依て三條家に至る諸參議も皆來集九州より野村　來

て近況を報す大久保十四日より出發に付數件を談決す十一字歸家

同十二日　晴十字前參官十二字歸家野村素助と同車してモリーの宅に至

る田中少輔杉浦弘藏、同席五字過歸家山田顯義吉田右一瀧彌太郎河野龜太郎來話山田は九州行の相談なり今朝河北俊介も來て九州行の事を談す森寺常德條公の命を以來り島津老公の此度の紛紜に付歸縣して鹿兒島縣の益鎭靜の爲盡力いたし度趣内願あり依て其事の内談なり

同十三日　雪三浦梧樓再度訪山口範藏此度肥前奮國の騷擾に付今日より歸省せり依て暇乞を來れり且佐賀の近情を談す

河野權大判事來訪同人も此度佐賀の騷擾に付下向せり依て暇乞に來り且土州の近情談し置けり山田顯義も同斷依て數件爲相談來訪せり

三條公伊藤博文より書狀到來中島四郎來訪

三字過より大久保に至り告別内外數件を相談せり歸途河野權大判事を訪ひ槇村の事を談し置けり其より宍戸璣を訪ふ平岡中島奥平等と會話す河北義二郎も此度至于九州暇乞に來れり

同十四日　晴三浦芳二郎山田一同至九州依て暇乞に來れり

河野龜太郎も同樣大久保一同到九州屢來訪終に不得面會

九字文部省に出勤其より正院に參仕

參議兼文部卿　木戸孝允

大久保内務卿九州出張中内務卿兼勤被仰付候事

明治七年二月十四日　太政官

參議兼内務卿文部卿　木戸孝允

病中に付不及日勤候得共精々相扶時々出仕可致事

明治七年二月十四日　太政官

於正院評議濟の上内務省へ出勤諸地方官へ九州騷擾に付ては其々御所分有之候に付管轄内を肅整に取締り人民安堵候樣可取計云々の主意を

以相達及大坂兵庫金川東京四方の諸縣東京府等へ別段取締嚴重に可致云々相達せり其より文部省に至る于時少輔大丞已に退出依て用件數條を申越せり其より板垣退助を訪ひ又中井弘藏を訪ひ六字歸家林三助今日ホリス百七十五人山口縣より到着の趣を來談せり光永直介中村與八波多野〻、世話をいたし來れり依て情實及山口の近況來談せり山本清十郎の書狀をも持參せり來原妹臼井要助を同伴し來れり今朝吉田右一郎山口縣より電報せし佐賀の近況を持參し且別に數件を相談せり夜内務省より福岡縣の傳報を持せり

同十五日　晴北風烈吉田右一河瀨大丞中村芳三郎横山孫一郎來話

日下義雄過日米國より歸朝近況談話

十字過より染井に至り中島を訪ふ宍戸亦來會認食談話數時其より別業に至る中島宍戸平岡等又來訪四字歸家田中少輔夫婦野村素介夫婦來訪同食皆一泊す文部中の事務を談す

三條公高輪公伊藤杉等より書狀到來

福岡佐賀傳信到來形勢甚切迫

同十六日　紀州多田彌吉此度ホリスを同行二百人して東上す云々の事情あり依て來話せり野村靖佐畑健助吉田右一來話

田中野村等と染井に至るモルリー亦來訪四字歸家（田中は直に歸れり）野村夫婦番丁に歸りて一泊せり薄暮野村と宍戸を訪ふ

今夜二字大久保神戸へ着の傳報あり四字肥後鎮臺兵と佐賀の賊發兵端し傳報あり（皆内務省より持來）

（鼇頭）田中野村と高力を訪ふ

井上世外より書狀到來

同十七日　曇又晴谷口起孝來話昨夜睡眠纔二字七字より内務に至り其より正院に出又警視廳文部省に至り事務を終へ五字歸家山田武甫（内務六等出仕）若松酒田の二縣へ遣わす依て來話せり河瀨大丞内務の事務を來談山縣

狂介山尾常二郎安藤直五郎來話

頃日此他客來如山皆謝絶す

（鼇頭）澤半二郎來訪

同十八日　晴河瀨大丞杉宮内大丞陸奥陽之助來話正院へ九字參仕二字後警視廳内務省文部省に至り歸途日本筋通り散歩し森寺常德を訪ふ不在六字前歸家西郷陸軍大輔伊藤參議より來翰島田助七三吉周亮（鳥取縣の事情を語れり）石部祿郎有地品之允林三助等來話電報福岡小倉馬關等より達す佐賀縣令行衞不知鎭臺兵二中隊殞滅の傳聞ありしところ縣令始本丸を免れ三潴縣に至り鎭臺兵と合すと云

（鼇頭）正院へ參仕の前岩倉家にて會議地租改正の事を論し漸山口縣の改正決定せり地租改正是を以て第一着とす

同十九日　曇又雨岩倉森寺島地より來翰河瀨大丞福原一介黑田了助山縣狂介來話（公事なり）九字過より正院へ參仕二字より高輪邸に至り從三位公へ謁し近況談話いたし御同食後柏村に至る九字歸家電報小倉福岡馬關等より達す其中大久保福岡に達せし報知あり

同廿日　晴吉田右一船越衞三ノ村利右衞門來話（船越は中國行吉田は地租論三ノ村は府下近況の云々なり）宍戸璣より書朝到來十字參仕三字より内務省文部省に至り五字過歸家木梨信一山尾庸三三戸忠至谷口起孝（明日より歸京横村起孝への一書を託す）天野清三郎（不日長崎へ出張）吉田右一（明日より歸縣）島地默雷等來話吉田天野等と同食告別す

柏村陸奥三條家より來翰森寺より來翰余馬車馬探索して不得條公拜領の馬二匹を貸與せられし高意と雖も心甚不安余頃日正院或は内務或は文部或は警視廳と奔走し然して病骨甚苦む依て頃日御厩の馬中二匹を御拂下けを願ふ然るに不圖此事あり却て病骨の苦より又一層の苦なり福岡縣より大久保電報達す兵軍其外皆博多へ到着是より進軍戰の模樣はをひ々々達するとあり

野津少將よりも傳報あり兵隊皆着是より進軍云々なり

同廿一日　曇船越衛來訪（近日より藝州へ被差遣候に付來話）河瀨内務大丞陸奥陽之助多田彌吉兩人はポリス一條山縣狂介（出軍云々來話）來話

昨夜三條公へ當時騷擾の際に付雖休日正院を開かれんことを上申す依て今日正院を被開十二字參仕の事を申來れり直に參仕々々懸岩倉邸に至る

長與專齋野村靖來訪

四字歸家直に宍戸璣を訪中島四郎亦來會夜共に誘引せり中島一泊

大久保より電報到來三手にて進軍本軍は田代口なり云々

野津よりも同樣の電報達せり

田中光顯後藤象二郎河路大警視等へ書狀を出せり三條岩倉兩家書狀到來

（籠頭）大久保より巡査六十名を長崎へ可遣等申越せり

同廿二日　曇川路利良大久保一翁黑田良助（皆公事也）來訪

十字前參院二字過より内務へ參省歸途三浦梧樓を訪ひ又河瀨に至り大久保への電報を托す

伊勢氏華大津唯雪（山口縣）河瀨安四郎夫妻花房義質（去年十二月於香港認めしもの）書狀到來

三條公後藤象二郎書狀到來夜二度電報到來轟木にて佐賀賊兵を破り賊兵放火して退く云々あり

（籠頭）與平二水今日式部寮八等出仕を命せられし

同廿三日　雨安場逸平（マ、令縣）來て祿税一條の事を談す川路大警視來て紀州巡査歸縣の事を談す十字前文部省へ出勤二字歸家林三介（長崎出張の巡査小銃一條なり）默雷來訪五字宍戸璣を訪ひ六字過送り來る村瀨讓來話山本清十郎山口縣巡査百三十名同道して歸京山口縣及九州邊の近況を承知せり

河瀨内務大丞來訪戰爭新聞を禁せし不都合を論し置けり

出張の海軍より電報來る

同廿四日　曇又晴又雨又曇

平岡通禧來話川路大警視來談後藤象二郎來話山口縣少屬茅原信行出京

山口縣近況を承知せり中野權令より書狀到來十字參院其より內務文部

の二省に至り又警視廳に至る

九州出張本營の報知福岡傳信を以達せり昨廿三日大戰爭大に苦戰終に

打捷ち神崎に進めりと

島田助七九州に至る依て大久保內務卿及河野權大判事に一書を托せり

桂太郎大坂に至る

五字過より宍戸璣を訪ふ談話數字十字前歸家川路大警視より屢來翰

同廿五日　晴又雪戸田三郎來話（華族集會所其外諸縣等の事なり）井上世外浪華より歸京來訪

十一字參院二字より內務省文部省に至り歸途染井に至り花留平岡中嶋

を訪ひ五字過歸家又宍戸を訪ふ

福岡より進軍せし一隊の番兵賊に逐れ本陣に不能通賊本陣を圍むを本

陣中に不知甚苦戰せりと電報あり

小倉より兵隊を福岡へ出せし電報あり

廣嶋より大坂一大隊廣嶋一中隊山口分屯一中隊を福岡よりの電報によ

りて出すとあり

宍戸璣國貞直人山本清十來話（山本は山口よりの巡査三百名を申遣わせしことを話す）三條公より長崎

へ福岡兵を送ることに付御相談申越されし

同廿六日　晴佐々木司法大輔河瀨內務大丞松平內務少丞川路大警視（皆公事也）

三浦少將來訪杉孫七郎等と同車高輪邸に至り其より野村素介の宅に至

る（今日野村の招きなり）田中文部少輔夫妻同席五字相去歸途井上翁を訪ふ不在六字

過歸家

久保名東縣知事より書狀到來彼地時情等申越せり

櫻井虎太郎建言（マヽ）二通を持參せり横山孫一郎代言者一條に付留守へ來訪

岩卿より書狀到來

（鹿頭）
電報到來

同廿七日　晴又曇藤井八十衛昨日歸京今朝來て見分の事情を語れり櫻井虎太郎へ面話せり

十字參院征討總督始明後三月一日御出發の評議あり

退出より內務省に至り又文部省に至り五字の蒸氣車にて直に横濱に至り井上世外の新宅へ一泊す夜澁澤〻、も亦來話

電報再度到來賊勢益蹙

同廿八日　晴十一字辭去〻より洋店に至り一字の蒸氣車にて歸京直に文部省に至る于時備前騷擾の報あり伊藤より昨日余に書狀を寄せ又條公よりも書狀到來頻に余を待れり依て直に岩倉家に至り其より又正院に至り條公に謁し備前の處分を談し直に退出又岩倉に至り其より文部に至り林內務大丞を呼ひ林出仕（元龜吉と云當時內務〻、出仕）を備前へ出張云々を達し置けり

電報到來官軍攻擊堺町と云處に進む賊軍死傷五六十人（堺町は佐賀より一里半と云）なりと云

松方租稅頭來話（因州國情に付云々相談せり）

河瀨內務大丞來話（內務事務也）

山縣陸軍中將來談此度總督宮御出發に付前後の始末云々なり福原和勝靜間謙介等も皆隨行せり依て暇乞に來れり今日爾他客來充滿

平岡通禧中島四郎來泊

昭和八年三月二十日印刷
昭和八年三月廿五日發行

不許複製

木戸侯爵家藏版
編纂者　妻木忠太
東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者
發行兼印刷者　早川良吉

木戸孝允日記第二
非賣品

64
269

終